

寶曆明和のころ、武藏の國豊島郡代々木村といへる處に、行水政右衛門と云ふ者ありけり、農家にして身上大いに富めり、這政もん壯年より暑寒とも、冷水にて行水する事をこのむ、夏の夕湯を以身をあらひ、汗を流し去事、世間みな同じ事なり、獨這政もんは水をもつて、身を洗ふ事を、夏にかきらず、冬極寒の時といへども、盤に汲せ行水しける、亦食事も熱きものを喰す、皆悉く冷物を食す、飯汁野菜のたぐひも、一端は焚せて、しばらく寒しおき冷たる時にいたりて喰しける、其外何にまれ熱きものを喰たる事なし、寒中風雪などの日、他へ行て歸れば、忽ち井の水を汲せて、背より五六度あみ、夫より躬をぬぐひて、家に入て座し、少時ありて、ヤレ／＼大いに温まりしと云けるとなり、予<sup>五〇八</sup>島が父這事を聞、わづ／＼尋ねいたり、政もんに出會して談話せしに、當時齡百六歳なれども、齒一枚もぬけず、髪も白髪わづかにまじり、いたりて色白く、元來躬達者にて、當日庭上に薪を破りて居りしとなり、奈何なれば、然やうに冷物のみ好玉ふぞと問に、政もん答て云やう、都て人壽百歳とて、百までは生らる、物なるを、世間の人、みな色食の一つより命を縮て、はやく死るなり、今の世の人の如く、熱食のみする時は、忽ち氣の上る病おこりて、頭上熱く下冷わたりて、死骸にひとし、是則ち下より死支度する、初なりとは知ずして、愈色食の二つに心をとられ、終にははやく冥府におもむく、いと歎しき事ならずや、我如く冷物のみ食する時は、下熱かに上冷て壽永し、亦熱き湯に入て沐浴するときは、總身血のめぐりあしくなるなり、我壯年より冷物のみ喰し、水にて沐浴するをもて、百餘年の今日まで、病といふ事を、願くは世人我如くして長壽を保ち給へかし、然どもおのれが如く、眞の冷物は、逆も喰しがたかるべし、唯熱食をやめて、温きものを食すべし、湯もぬるきを浴給へと、教けるとなり、這政もん夫より後も猶無病にて、久く存命せりとぞ聞し。

〔後拾遺和歌集

九

羈旅〕

はりまのあかしといふ所に、しほ。ゆ。あ。みにまかりて、月のあか、りけるよ、中